

同治回疆叛乱前史（改）

荒 川 優

序に代えて

古来西域と呼ばれた新疆は、天山山脈を境にして二つの地域に分かれている。天山以北のジュンガリアの平原や峡谷には、草原地帯が広がり、天山以南の東トルキスタンは、雪解け水に育まれたオアシス地帯を除く大部分が砂漠に覆われている。この地域では、長い間、草原の遊牧民とオアシスの定住民の相互関係を軸にした中央アジア独自の歴史世界を展開してきた(1)。しかし、十八世紀から十九世紀にかけての東トルキスタンに於ける時代の変化は、非常に急激であった。一七五五～六〇年頃、ジュンガル部の滅亡とそれに伴う清朝の東トルキスタン征服により、草原の遊牧民とオアシスの定住民の相互関係を軸にした中央アジア独自の歴史世界は終焉を告げた。また、一八六四～七七年、ムスリム反乱の勃発とヤークーブ・ベグ政権の樹立、ロシアのイリ侵略や左宗棠の征西など、数々の一連の事件を経て東トルキスタンは近代世界へと巻き込まれていったのであった。そして、一八八四年の省制施行により、現代にまで至る新疆維吾爾自治区の基が形成されたのである。

本稿は、神奈川大学大学院外国語学研究科に修士論文として提出した拙稿『同治回疆反乱前史』の簡略版である。本稿では、反乱当初最大規模を誇ったクチャのラシッディン政権の足跡を中心に、十八世紀以来の約百年に亘る清朝の新疆統治体制を崩壊させた一八六四年のムスリム大反乱所謂同治回疆反乱について描き出していきたい。

本稿に於いて使用した最も主要な資料としては、金浩東 Kim, Ho-Dong『中国領中央アジアに於けるムスリム反乱とカシュガル・アミール政権一八六四～一八七七(The Muslim Rebellion and the Khashghar Emirate in Chinese Central Asia, 1864-1877.)』とモッラー・ムーサー・サイラーミー Mullar Musa Sayrami『安寧史(Tarih-i Amniyya)』の二点である。

前者は、韓国人の研究家金浩東氏による英文で約三百頁にも及ぶ研究文献であり、同氏が一九八六年五月ハーバード大学に提出した学位申請論文である。十九世紀東トルキスタンに於けるムスリム反乱史を扱った論稿の中では最大にして最高の通史である(2)。後者の『安寧史』は、一九八九年に烏魯木齊で出版された。『タリーヒ・アミニーヤ』の現代ウイグル語版である。『タリーヒ・アミニーヤ』は、同時代を生きた現地人によるウイグル語文献で、ラシッディン政権とヤークーブ・ベグの興亡を中心にした歴史書である。この作品の著者モッラー・ムーサー・サイラーミー(1836-1917)は、クチャのラシッディン政権の主要幹部であるブルハニッディン・ホージャの息子マフムッディンの幕僚を務め、クチャ政権滅亡後はヤークーブ政権のアクス方面の商税徴集官の書記を務めた人物であった(3)。濱田正美氏は「この作品が十九世紀ウイグル歴史文献中の白眉であり、最も基本的な史料であることは疑う余地がない」(4)と評している。

尚、現代のウイグル族に相当する当時の新疆のトルコ系定住民には、「ウイグル」という様な統一的民族名称は持たず、トゥルキーTurki、ムスルマン・ハルク Musulman Khalq 等と自称し、或いはカシュガルリク Khashgharliq、ホタンリク Khotanliq 等と地方名で名乗っていた。「ウイグル」という呼称は、一九二一年、旧ソ連領タシュケントで採択され、一九三五年、中華民国新疆省政府の承認の下に採択されたものである(5)。本稿では、当時の東トルキスタンのトルコ系定住民に対して、便宜上「ウイグル」という呼称を用いることにする。

(1) 間野英二『中央アジアの歴史』講談社現代新書 1977, 同他『内陸アジア』朝日新聞社 1992 を参照。

- (2) ウイグル語研究会編『GULBAGH』東京 1992
- (3) 堀直「歴史認識と歴史叙述」(『現代歴史学入門』東京大学出版会 1987)
- (4) 濱田正美「一九世紀ウイグル歴史文献序説」(『東方学報』第 55 冊)
- (5) 佐口透『ロシアとアジア草原』p.198-199, 同「東トルキスタンと清朝」(『岩波講座 世界歴史』13) p.129-130, Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.86-87.

第一章 反乱前史

1) 清朝の新疆征服

一七四五年英主ガルダン・ツェリン Galdan Tsering(r.1727-45)の死去以来, 中央アジアに強勢を誇った騎馬遊牧国家ジュンガル部も主導権をめぐる相次ぐ内乱によって次第に弱体化していった。一七五三年ダワチ Dawachi が主導権を握ると, そのライヴァルであるアムルサナ Amursana の要請に拠り, 一七五五年乾隆帝は五万の大軍を送ってこれを討った。後に清朝の処遇に不満を抱いたアムルサナは蜂起したものの, 一七五七年に敗れ, ロシアへ逃亡中に病死した。この時, 清軍の虐殺と天然痘の流行によって, ジュンガル部民はほぼ全滅状態であった。ここにユーラシア史上最後の騎馬遊牧帝国は滅亡した。清朝による東トルキスタン支配はこの歴史的事件に付随して発生したのであった。

清軍は東トルキスタンを征服するとき, マフドゥームザーデ Makhdumzada に率いられたオアシス定住民の抵抗を受けた。元来, 新疆はトルコ系ムスリムであるウイグル人の住むトルコ・イスラム社会であり, そこにはイスラムの伝統が受け継がれていた。そこでは, 十六世紀以降, マフドゥームザーデないしはカシュガル・ホージャ家と呼ばれるナクシュバンディー教団系 Naqshbandiyya のイスラム神秘主義者たちが人々の尊崇を厚め, 大規模な土地の寄進を受けて経済的にも強大となり, 十七~十八世紀の間, 彼らの権威は君主(ハーン)の権威と並ぶほどであった。このマフドゥームザーデにも二つの家系があった。一つは, 白山党 Aq taghliq とも呼ばれるアフアーキー

派 Afaqi (別名イーシャーニー派 Ishani), もう一つは、黒山党 Qara taghliq と呼ばれるイスハーキー Ishaqi 派である。両者は主導権をめぐって、終始、相互に激しい闘争を繰り広げていた。清代、東トルキスタンの住民に大きな影響力を残し、重要な役割を果たすのはアフアーキー派の方であった。

一七五五年ダワチ打倒直後、清朝はジュンガルによってイリに拘禁されていたアフアーキー派の指導者であるブルハン・アッディーン Burhan al-Din, ホージャ・ジハーン Khawja-i Jihan 兄弟を解放し、東トルキスタン統治に利用しようと目論んでいた。その年の末頃、ジュンガルの手先として東トルキスタンを支配していたイスハーキー派のホージャたちを打倒して東トルキスタンを併合した。ここに、アフアーキー派のホージャたちを手先にした東トルキスタン支配が確立されたかのようにみえた。しかし、ホージャ・ジハーンは、兄ブルハン・アッディーンの清朝への帰順策に反対し、イスラムの復興と独立を望んでいた。一七五七年、清朝はホージャ勢力の復興を快く思わないベグ豪族たちの援助を受けて、ホージャ勢力を掃討し、一七五九～六〇年にはパミール山地にまでいたる東トルキスタンを完全に征服した。清軍に敗れたブルハン・アッディーン、ホージャ・ジハーン兄弟はバダクシャンに逃れたが、その地で非業の最期を遂げた。ここに、草原の遊牧民とオアシスの定住民の相互関係を軸にした中央アジア独自の歴史世界は、終焉を告げた。このジュンガリアと東トルキスタン併合は漢代、唐代の西域経営とは異なり中国への永続的併合の道を開いたのであった。

2) 清朝の新疆支配体制

清朝が準部と回部を征服したとき、これらの地は併せて「新しく闢かれた疆域」所謂新疆と称された。イリ Ili, 塔城 (タルバガタイ Tarbaghatai) を含む豊かな草原地帯であるジュンガリアの地は天山北路に属した。又、アルティ・シャハル Altishahr (六城) 或いは東トルキスタンなどと呼ばれるホータン Khotan, ヤルカンド Yarkand, ヤンギヒサル Yangihissar, カシュガル Khashghar, 烏什 (ウシュ・トルファン Ush Turfan), アクス Aqsu, ク

チャKucha, カラシャール Qarashahr 等のターリム盆地のオアシス都市は天山南路に属した。そして、早くから清朝に服属していたトルファン Turfan, 哈密 (クムル Qumur), 巴里坤 (バルクル Barkul), クルカラウス Qur Qaraus, ウルムチ Urumchi 等の地は東路に属していた。

清朝の東トルキスタン征服は、元来ジュンガル部打倒の副産物に過ぎなかった。そのため、マフドゥームザーデ支配下の東トルキスタンは、ジュンガル滅亡と同時に、自然に帰順するものと期待されていた。したがって彼らの抵抗は、清朝にとって予想外のことであり、清朝は前もって東トルキスタン支配のための統治策を準備していたわけではなかった(1)。一七五七～五九年のアファークー派討伐後、ジュンガル部の様な強大な遊牧勢力の再現の可能性を絶ち、そのために必要な軍隊駐留の財政負担を現地で賄うために、乾隆帝は当初東トルキスタンにも内地と同様に州県制を敷き、直接的統治を行おうと考えていた。しかし、州県制は漢族の自由な移住をまねき、新疆を漢族の植民地化する危険性があった。このことは、内外蒙古、チベット等の非漢民族世界が漢族によって分断されることとなり、非漢民族勢力を自己の陣営に引き入れることを国策とする清朝としては、財政上の難題があるとしても、容認できる問題ではなかった(2)。こうして、新疆は満洲族将軍による軍政下に置かれ、内外蒙古、青海、チベットについて、理藩院治下の「藩部」として位置づけられた。結局、清朝は満洲族による藩部支配を貫徹させるために、州県制を敷かず、財政上の問題を考慮しなかった。そのため、新疆統治に必要な軍隊駐留の経費を支えるため、中央の戸部から毎年三百万両もの軍餉を仰ぐことになった。

新疆統治の中樞は、かつてジュンガル部の本拠地イリに置かれた。最高軍政官として総管伊犁等处将軍（通称は伊犁将軍）が配置され、南北両路を統轄した。そして、伊犁将軍の下に南北両路の主要都市には参贊大臣、辦事大臣、協辦大臣、領隊大臣等が置かれ、諸大臣は八旗兵を指揮して諸都市の監督と守備にあたった。その中、カシュガル参贊大臣は伊犁将軍の監督下に天山南路全体を統轄した。甘肅省に隣接する東路は、対ジュンガル作戦上から、康熙年間より清朝に服属しており、ウルムチ、バルクル地方では駐兵屯田と

漢族等の移民が進み、哈密、トルファン地方も早くから帰順していたため、内地とは特別な関係にあった。そして、この地は伊犁將軍の節制を受けたウルムチ都統によって統轄されていた。伊犁將軍、及び諸大臣等の高官は、清代を通じて滿蒙旗人に独占され、漢族はほぼ完全に排除されていた(3)。

駐留の官兵には八旗兵と綠營兵の別があり、本来八旗兵は將軍・大臣の統制下に、綠營兵は提督以下の武官の指揮下にと、その指揮系統を異にしていた。新疆では八旗兵については將軍以下の系統が厳然と存在していたが、綠營兵については形式的なものに過ぎず、実際の指揮・命令系統は八旗系統の大臣がおこない、東路のウルムチ提督でさえもウルムチ都統の統轄を受けたのであった(4)。

新疆駐留の官兵には、家族同伴で駐留する駐防軍と一定期限で交替する換防兵の二種類があった。一七六〇年代には、新疆駐留の官兵は総計約三万をかぞえ、その内、五分の一程が主に綠營兵を中心にして換防軍として南路に配置され、残りの五分の四が主に駐防軍として北路と東路のイリとウルムチを中心に配置されていた。以上の様に、新疆駐留の清軍は北路と東路を含む北疆において重点的に配置されていた。しかし、この様な配置の不均衡は南路に対する軍事的輕視を意味するわけではなかった。それはむしろ南路に対する軍事的慎重性を示していた(5)。即ち、北路は東にハルハ・モンゴル、南にウイグル、西にカザフやロシアの動向に対処する上で好都合なばかりでなく、かつてジュンガルの様な強力な遊牧国家を育んだ豊かな牧草地であるという戦略的重要性を持っていた。

一方、南路はオアシス世界の分散性にも関わらず、土着のムスリムたち所謂ウイグルがイスラムの宗教的紐帶によって糾合される危険性をもっていた。しかし、八旗兵の絶対数が不足している上に、漢族の綠營兵を大量に派遣することは、漢族と非漢族系の住民との接触を意味し、それは清朝の藩部統治の基本からいっても認められなかった。そこで、既存の城塞を障壁で区切るか、新たに城塞を築き、そこに換防兵や派遣官員、往来する漢族を居住させ、土着の住民との接触を極力少なくする形で監視体制を敷いた。このような城塞は、滿城または漢城、イエニ・シャハル *yengi shehr* (新城) などと呼ば

れ、従来の土着ムスリムであるウイグル人たちの居住区は、回城、クナ・シャハル kuhna shahr（旧城）と呼ばれた。又、北路・東路においても新たに城塞を築き、そこに八旗兵を駐屯させていた。

清朝は新疆統治の上で、軍事的、地理的、民族的、宗教的そして歴史的諸条件の差異を考慮し、州県制、扎薩克制、ベク官人制の三つの行政制度を併用した。州県制は、中国内地と同じ制度で、中央から派遣された文官が直接に人民を支配するものである。これは、ウルムチ、トルファン、哈密、バルクルなどの漢族の人口が多い東路に設置されたもので、東トルキスタンにおける土着ムスリムの支配には直接関係はなかった。次に、扎薩克制は、部族集団などの首長に王、公、貝勒、貝子などの爵位を与え、その世襲を認め、土地、領民の支配権を許した一種の封建制度である。その首長は扎薩克、即ち旗長として軍事的編成下に置かれた領民を率いて、清朝の動員に応じなければならない義務を負っていた。この扎薩克制は天山北路に遊牧するモンゴル系のトルグート部やホシュート部の族長と、ウイグル系の哈密王家、トルファン王家に施行が許されていた。

南路は、オアシス農耕を主業とするトルコ系ムスリム＝ウイグル社会であるが、同様の自然・社会環境にある哈密、トルファンの様な清軍の征服前に早くから帰順した地域とは異なり、扎薩克制は敷かれず、ベク官人制が施行された。ベク(bek)とはトルコ語で「頭目」を意味し、本来は貴人の称号のみに使われていた。ジュンガル時代には、土着支配階級である豪族身分を示す称号であった。清朝の征服後は、以前から存在した民政にかかわる役職にベクの称号を付して新しい官職とした。これらのベク層に民政を委ねる統治策は、ホージャ時代やジュンガル時代の制度を継承したものであった。ベク官人には、その役割に応じて三十五種類の称号があった。また、ベク官人は三品から七品の品秩が与えられ、養廉銀と耕地、及び燕斉と呼ばれた耕作者等が品秩に応じて給付された。ベク官人は定まった任期はなかったが、世襲制ではなかった。その任免は各城駐在大臣からの北京への奏請によって行われた。これは、ベク官人層の過度な力の増大を制限するための方策の一つであった。三、四品の高位のベク官人には本処廻避の原則があった。しかし、実際

に厳格に遵守されたのは、三品官のみであった。又、高位のベク官人は、定期的に北京へ朝覲することを義務づけられていた(6)。尚、ベク官人のほかに、満洲族やムスリムの高官に使えるダルガーdarughaや、郷村の長であるバシ bashi などのウイグル人下級官吏が存在した(7)。

以上のような清朝の新疆支配体制の構造は征服直後の約十年間に制定され、ムスリム大反乱によってコントロールを失い、そのシステムの限界を痛感する一八八〇年代まで如何なる変化もなかった。十八世紀中は新疆での清朝の覇権に対する挑戦はなく、その理由は清軍の軍事力が強力であったばかりでなく、西方辺境に清軍を脅かす如何なる政治勢力も存在しなかったからである(8)。反乱も稀であり、一七六五年のウシュ・トルファンの民衆反乱や一八一五年のカシュガル近郊のタシュミリク Tashmiliq 村でのズィヤー・アッディーン・アホン Ziya al-Din Akhund の暴動などもあったが、これらの反乱は民族運動としての組織も欠き、清軍の圧倒的な軍事力の前に速やかに鎮圧された(9)。この様な優位性が動揺し始めるのは、十九世紀に入ってからのことであった。

3) 新疆支配体制の崩壊

一八二〇年代に入ると、清朝の新疆支配体制は、東トルキスタンにおける通商権益の拡大を目指すコーカンド汗国の野望と東トルキスタン奪回の聖戦を企てるアフアーキー派の残党たちによる挑戦によって大きく動揺した。一八二六年、その後裔ジハーンギール・ホージャ Jihangir Khawja (1790-1828) は異教徒清朝に対する聖戦 Jihad を唱えてカシュガリアに侵入し、コーカンド Khoqand 汗国の援助と清朝支配に不満を抱くウイグル民衆の参加を得て、大規模な反乱となった。これが所謂ジハーンギールの聖戦（張格爾の乱）である。ジハーンギール軍は、一時、カシュガル、ヤルカンド、ホータンを陥れる勢いであった。しかし、翌一八二七年清軍の反撃が始まると、敗走してパミールの山中で捕らえられ、北京に送られて処刑された。

この事件によって、清朝は東トルキスタン支配体制の脆弱性を痛感した。

張格爾の乱の事後処理のため、欽差大臣那彦成が東トルキスタンに派遣され、統治機構への改革に着手した。その結果、ウイグル民衆の造反を促した清朝官吏およびベク官人層の腐敗や暴政の是正、カシュガル地方一帯での屯田等による軍備増強等の内部改革は一応の成果を収めた。又、ジハンギールを援助し、清朝にとって危険なホージャ家の残党たちの引き渡しに応じないコーカンド汗国に対しては、東トルキスタンにおける交易禁止等の経済制裁処置を採用した(10)。

一八三〇年、コーカンドの援助を受けたジハンギールの兄ユースフ・ホージャ Yusuf Khawja はカシュガリアを襲撃し、新疆西辺を脅かした。この事件によって、清朝は経済制裁がコーカンドによる東トルキスタンへの干渉に対する有効な抑止処置ではないことを悟った。しかし、清朝にはコーカンドに遠征軍を送るだけの軍事的・経済的余裕はなく、この中央アジアの一小国に、手を持て余したのであった(11)。清朝がコーカンドに対して宥和的な態度を取り、カシュガル地方における通商特権を譲歩すると、アフアーキー派の残党はコーカンドの厳重な監視下に置かれるようになった。ここに、清帝国・コーカンド汗国間の緊張状態は解消され、清朝の東トルキスタン支配は相対的な安定を迎えた(12)。しかし、この安定も長くは続かず、一八四〇年代からの両国の政治的混乱によって、急激に崩れていった。

清朝は一八四〇年代以降、阿片戦争(1840-41)、太平天国の乱(1850-1864)、捻匪の乱(1851-68)等の内憂外患によって帝国の礎は次第に弱体化していき、一八六二年（一説では一八五七年）から始まる陝西・甘肅での回民反乱は新疆支配体制をより一層荒廃させた。一方、コーカンド汗国もブハラ Bukhara 汗国との抗争や、相次ぐ内紛によって混乱し、カシュガル・ホージャ家への統制を弱めていった(13)。この様な混乱によって、両国は東トルキスタンへの統制力を失い、新疆は無秩序状態へと陥っていった。一八四五年カシュガルで鍛冶屋イワード Iwad の乱、一八四五年七人のホージャ Haft Khawajagan の侵入、一八五二年ワーリー・ハーン Wali Khan の侵入、一八五四年ハーン・アリク Khan Ariq でシャー・ムーミン Shah Mu'min の乱、一八五五年アスティン・アルトシュ Astin Artush でフセイン・ホージャ・イーシャーン

Husayn Khawja Ishan に率いられた暴動、一八五七年クチャでの反乱とワーリー・ハーンの第二次侵入、一八六一年アルトシュでアブド・アッラヒーム Abd al-Rahim の反乱等々の度重なる外寇や内乱は、当時の新疆の政治的・社会的な混乱振りを物語っていた(14)。

この一八四〇～五〇年代の混乱の原因の一つには、清帝国とコーカンド汗国の東トルキスタンへの支配力が徹底的に低下し、従来コーカンドの道具的存在に過ぎなかったカシュガル・ホージャ家の残党とキルギズ遊牧民が、独自のイニシアティヴで聖戦や略奪を行うようになったことである。そしてもう一つには、中央からの軍餉の断絶による、新疆当局の財政破綻と清朝官吏とベク官人たちの腐敗と圧制が進行して、ウイグル民衆の生活を圧迫したことである(15)。さらに、十九世紀中期に継続して発生した疫病(16)は、状況の悪化に拍車をかけた。

この様な時期、アフアーキー派のホージャたちの聖戦の相次ぐ失敗とコーカンド軍やキルギズ族たちの酷い略奪によって、多くのウイグル民衆の心はホージャたちの大義から離れ、アフアーキー派のホージャたちの権威は次第に色褪せていった。又、アフアーキー派と無関係な反乱の相次ぐ勃発は、事態の深刻さのみらず、彼らの影響力の低下をも意味した(17)。「マフドゥームザーデの影響力の低下と現地の民衆による反抗の成長は、他の都市の非マフドゥームザーデ系の宗教指導者たちの力を強化したに違いない」という指摘(18)は、一八六四年反乱の際、新疆各地に非カシュガル・ホージャ系の勢力が林立したことの伏線を示すものと言えよう。

一八六四年反乱前夜には、清朝とコーカンド汗国には共に、この地で混乱を收拾して安寧秩序をもたらす力はなく、カシュガル・ホージャ家もかつて程の影響力を失っていた。多くのウイグル民衆たちは、この混沌とした状態に終止符を打つ何かを期待していた。このように、清朝の新疆支配体制を崩壊させた一八六四年ムスリム大反乱所謂同治回疆反乱の前夜は、まさに一触即発の状態であったのだ(19)。

(1) 佐口透『ロシアとアジア草原』p.194-195。

- (2) 片岡一忠『清朝新疆統治研究』 p.60-61。
- (3) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.7。
- (4) 片岡一忠『清朝新疆統治研究』 p.63-65。
- (5) 片岡一忠『清朝新疆統治研究』 p.66。
- (6) 佐口透「東トルキスタンと清朝」 p.133-137, 片岡一忠『清朝新疆統治研究』 p.70-72, Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.10-12。
- (7) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.12-13。
- (8) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.7。
- (9) 佐口透「一九世紀中央アジア社会の変容」 p.255。
- (10) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.23。
- (11) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.25。
- (12) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.26-27。
- (13) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.26-29。
- (14) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.30。
- (15) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.30。
- (16) 1845, 1847, 1849 年にカシュガルでコレラが発生。1851-56 年カシュガル, ヤルカンド, ホータンで天然痘の流行。1855-56 年ヤルカンドで麻疹の流行。Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.30-31。
- (17) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.31。
- (18) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.31。
- (19) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.31-32。

第二章 同治回疆反乱とクチャ政権

1) 同治回疆反乱の勃発

モッラー・ムーサー・サイラーミーの『安寧史』によると、一八六四年六月四日「……クチャの東干たちは、あたかも天から降ってきたかの様に、突然蜂起して町に火を放ち、ヒタイたちを捕まえて殺し始めた。エリヤル・ベグを先頭にし、この様な苦しみを受けていたムスルマンたちも東干に加わって仲間となった。ムスルマンと東干たちは一心一帯になって団結し、アンバルと兵士たちの衙門へと侵入して行って火を放ち、夜明けまでに多くの異教徒たちを倒した。日の出と同時に、ヒタイの官人たちは幾何かの兵を集め、

対抗して戦ったが、対抗できずに失敗してしまい、終には、逃げざるを得なくなった」(1)。このクチャでの反乱の成功は、燎原の火の如く他の地域へ波及し、七月中までにはウルムチ、ヤルカンド、カシュガル、十月頃にホータン、十一月にはイリで反乱が勃発し、半年足らずの間に、新疆の大部分が清朝の支配から離れていった。これが所謂「同治回疆反乱」である。新疆全域に及ぶこの大反乱の特徴は、各地の反乱勢力が、ある特定の中核集団の指導や調整の下に連携し、計画的に引き起こしたものではなかった。蜂起した群衆たちが、衙門や官庫を襲って略奪放火を行い、敵と見做す者は皆殺しにするという様な無秩序状態の中から指導者が出現したのであった。そして、クチャでの反乱の成功が鍵となって連鎖反応的に他の都市へ波及していき、クチャ、ウルムチ、ヤルカンド、カシュガル、ホータン、イリの各々の地域にムスリム政権が樹立されたのであった(2)。

前掲の『安寧史』の記述の中でも見られる様に、クチャでの反乱の最初の引き金を引いたのはウイグル民衆ではなく、東干 Dungan たちであった。東干とは、中国北西部に於る回民の別称であり、一七六〇年代の清朝の東トルキスタン征服以来、彼らは兵士や商人、農民として新疆に移住し、反乱前夜の二八六〇年代までには新疆に於て相当な社会勢力となっていた。東干たちは、クチャでの反乱に引き続き、ホータンを除いた、ヤルカンド、カシュガル、イリ、タルバガタイの反乱(3)でも最初の引き金を引いた。つまり、彼らは同治回疆反乱に於て起爆剤の役割を果たしたのであった。

東干たちに大反乱の起爆剤的役割を促した要因として、一八六二年以来、陝西甘肅で続いている回民反乱の影響は無視できない。当時、陝西甘肅の回民反乱に呼応する動きも一部には見られた様(4)だが、新疆に於る東干たちの蜂起の直接的原因は、より衝撃的なものであった。金浩東氏の研究によれば、その原因は、清朝官憲による「東干虐殺命令」の噂であったという。しかし、重要なことはその様な狂った命令の存否ではなく、「東干虐殺命令」の噂が、当時、新疆で広く流布し、固く信じられていたことである。結局、東干たちが同治回疆反乱に於て起爆剤的役割を果たしたことは、長期にわたる陰謀の企ての結果ではなく、「東干虐殺命令」の噂によって恐慌状態に陥った東干た

ちが、虐殺の可能性に対する自衛のための自然的反応の結果であった(5)。

同治回疆反乱の直接的原因の他に、二つの背景的要因についても説明しなければならない。一つには、当時の社会・経済状態の悪化と、もう一つは、清朝による新疆統治の崩壊である。元来、清朝の新疆統治の経費は一部中央からの財政支出によって賄われていたが、十九世紀以降の相次ぐ内憂外患のため、一八五〇年代には途絶えてしまった。そこで、新疆当局は歳入不足を補うために、ウイグル民衆たちに対して、従来の租税に加えて新たな人頭税や塩税を課し、劣悪な労働条件の下に新しい鉱山の開発や水路の開削を強いて重い負担をかけた。又、清朝官吏やベク官人たちの腐敗の進行は、ウイグル民衆たちの経済状態の悪化に拍車をかけた。さらに、歳入増収のために買官まで行われた。官職を買い取った者は、その出費を取り戻すために、過酷な刑罰や罰金、各種の強制徴収によって民衆を搾取した。高位のベク官人やダルガーたちは、清朝官吏や中国商人たちと同様に、ウイグル民衆たちから深い恨みを買っていた(6)。前章でも触れた様に、一八四〇年代以降、清朝とコーカンド汗国は重大な変化に直面し、王朝の末期的状況を露呈していた。両国の新疆へのコントロールの喪失は、従来の勢力均衡状態の崩壊をもたらした。又、当時、新疆には相当規模の清軍が配置されていたが、それらの多くは、忠誠心の疑わしい東干兵か、戦闘準備に乏しい兵士たちであった。そして、新疆に於る相次ぐ外寇と内乱は、当時の清軍が潜在的な大反乱に対して有効な阻止力となり得ないことを示した。

結局、同治回疆反乱の直接的原因は「東干虐殺命令」の噂であるが、ウイグル民衆たちは虐殺命令の直接的対象ではなかったにもかかわらず、東干たちの反清闘争に合流した。この共闘の原因は、当時、ウイグル民衆たちは経済的圧迫に喘ぎ、諸悪の根源が「異教徒による支配」であると感じていたためであった。クチャに於る反乱成功の知らせは、他の諸都市のムスリムたちに、清軍の力が取るに足らないことを教え、反清蜂起へと勇気づけたに違いない。又、清朝官憲による東干兵の武装解除や政治・宗教的に鍵となる人物の逮捕命令などは、事態を鎮静化させるところか、ウイグル民衆たちの不安や疑念をも高めた(7)。この様な一触即発の緊張状態が極に達した時、反乱が

勃発したのであった。金浩東氏は1864年反乱のことを、「即興的反乱 Instant Revolt」と呼んでいる。この反乱の勃発を促した原因と事情の特性が、後の事件の大勢を定めたのであった(8)。

2) ラシッディン政権の樹立

金浩東氏は、同治回疆反乱を二つの段階に分けて説明している(9)。まず最初の段階は東干虐殺命令に対する直接的反応である。この反応は突発的でほとんどヒステリー状態であった。蜂起に参加した様々な社会集団や民族集団は、永年の異教徒支配と社会・経済的状況の悪化に対して大いに憤激していた。そして各々の集団は、各々に対して影響力を持ち、彼らの怒りを代表する指導者たちに率いられていた。しかし、清朝官吏やベク官人などによる既存の政治的秩序が崩壊すると、その時には、異なる種々の集団を掌握できる指導者はなかった。そして次の段階では、この様な矛盾を克服するために、異なる社会集団や民族集団を統一できる新しい指導者が求められた。こうした状況の中で、新しい指導者たちは、しばしば異なる集団間での妥協の結果として誕生した。クチャにはラシッディン・ホージャ政権、ウルムチには妥明アホンの清真国(10)、イリのムアッザム Muazzam 政権(11)、ホータンにはムフティー・ハビーブ・アッラー Mufti Habib Allah 政権(12)、ヤルカンドにはグラム・フサイン Ghulam Husayn、或いはアブドゥル・ラフマーン Abd al-Rahman 政権(13)、カシュガルでは、キルギーズの頭目シッディーク・ベグ Siddiq Beg 政権(14)などが樹立された。これらの新しい指導者たちの実権の有無はともかくとして、カシュガルのシッディーク・ベグ政権を除く、全ての指導者たちは宗教指導層の出身であった。このことは、同治回疆反乱に於る際だった特徴であった。

クチャでの反乱は、数人のアホン Akhund たちに率いられた東干たちによって始められ、そしてすぐに、エリヤル・ベグ Allah Yar 指導下のウイグル民衆たちの参加を得た。クチャの清軍が一掃されると、周囲の村々の人々が都市の中に群がり始め、ジハードを叫び、略奪と復讐に参加し、事態は手

に負えなくなってしまった。東干のアホンたちも、エリヤル・ベグもこの無秩序状態を鎮静化するだけの力を持っていなかった。町はすぐに東干、クチャのウイグル人、コーカンド人、カシュガル人などの集団へと分裂していった。そうして、この様な混沌とした状態を收拾できる人物を探さざるを得なくなったのである(15)。

当初、群衆たちは、前カシュガル、ヤルカンドのハーキム（知事）であり、クチャで隠居していたアフマト・ワン・ベグ Ahmad Wan Beg の所へ行き、クチャの指導者になるよう提案した。しかし、アフマト・ワン・ベグは清朝への忠誠を誓ってこの様な提案を拒否した。これに憤激した群衆たちは、クチャのハーキム、クルバン・ベグ Qurban Beg を含む他のベグたちと共に、アフマト・ワン・ベグを屋敷から引きずり出して処刑した(16)。その後、群衆たちは、メヴラナ・エルシッディン Arshad al-Din (?-1364/65) の子孫(17)で、その廟の管理者であったラシッディン・ホージャの所へ行った。そして、彼は礼拝所から連れ出されてハーンに即位させられた(18)。この時以来、ラシッディンは「ハーン・ホージャ」と呼ばれるようになった。

以上からも分かる様に、ラシッディン・ホージャは当初から反乱の指導者であった訳ではなかった。偶然の成りゆきによって反乱の表舞台に立ったに過ぎなかった。もし、アフマト・ワン・ベグが群衆たちの要求を受け入れていたとしたら、ラシッディン政権は成立し得なかったに違いなかった。この政権も清朝権力の崩壊後の混乱を收拾するために暫定的に選ばれたものに過ぎなかった。そのため、政権を維持するための強固な権力基盤や不可欠な政治機構を持っている訳ではなかった。そこで、この様な弱点を補うために、イデオロギー吹き込みと打算的な手段としてシャリーア（イスラム法による統治）とジハード（異教徒に対する聖戦）を強調した。

3) クチャ政権の拡張

同治回疆反乱の勃発はあまりにも突然であったので、異なる地域に割拠する反乱勢力は連携を欠いていた。清朝の新疆に於る政治権力が崩壊した後、

樹立された独立政権は、覇権を握るために互いに争い始めた。そのような中で誕生したムスリム勢力の中で、クチャが最も精力的かつ攻撃的であった。同治回疆反乱中、クチャ政権の他には、自己の支配地域を越えて行動することができたムスリム政権は存在しなかった。そして、東トルキスタンとジュンガリアを含む広大な新疆を統一できる政権も登場しなかった。しかし、クチャのみが例外であり、新疆全体でないにしても、東トルキスタンを統一する可能性はあった。ラシッディン・ハン・ホージャは即位後、直ちに二つの遠征軍を組織した(19)。そして、各々の遠征軍の指揮官としてラシッディンの二人の従兄弟が任命された。ブルハニッディン・ホージャBurhan al-Din Khawja（別称ハーティブ・ホージャKhatib Khawja）は、アクス、カシュガル、ヤルカンド、ホータン征服のための西方遠征軍の総大将に任命され、東方遠征軍の総大将にはイスハーク・ホージャIshaq Khawjaが任命された。クチャ政権の偉業は一八六五年七月にハーン・アリクの戦いでヤークーブ・ベグに壊滅的な敗北を喫するまでは、非常に輝かしいものであった。最盛期には、西はウシュ・トルファン、ヤルカンド、東はカラシャールまでの広大な地域を支配していたのであった。

イスハーク・ホージャに率いられた総勢二百程の東方遠征軍は、ブグルBugurとクルラKurlaに進撃し、六月中に陥れた。そして、多くのムスリムたちがクチャ軍に加わった。クルラからはカラシャール方面に進撃したものの、カラシャール前面の河川で砲艦を用いた清軍の抵抗に遭い、渡河作戦を諦め、主要街道を避けて狭い峡谷を通過し、バグラシュBaghrash湖を迂回した。ウシャックタルUshaq Talという地点に到着した時、そこに陣営を張る清軍に予想外の遭遇をした。およそ二千程のクチャ軍は、その清軍を果敢に襲撃し、激しい戦闘の後、清軍を粉碎した。カラシャールへの進撃中、チュグルChughurで別の清軍と遭遇し、そこでもイスハークに率いられたクチャ軍は勝利を収めた。そして東方遠征軍は、七月末から八月初頃、カラシャールに到着した。クチャ軍の到着前の七月十四日、既にカラシャールはその地の東干たちの攻撃を受けていた。クチャ軍が都市を陥れたのは、その一週間後のことであった(20)。

カラシャールでの休息の後、その周辺で遊牧するモンゴル人たちの加勢を得たクチャ軍は、八月中頃、東方遠征を再開した。トクスン Toqsun 城塞を攻略後、トルファンを包囲した。クチャ軍の接近に伴い、トルファンのムスリムたちは蜂起し、都市攻撃に参加した。それから間もなくして、イスハークのクチャ軍の元に、ウルムチの東干たちから援軍要請の使者が訪れた。当時、ウルムチの東干たちは、妥明アホンを清真王として清真国を宣言した後、ウルムチ満城攻略に苦戦していた。彼らは、多くの東干たちが住むマナス Manas やクルカラウス Qur Qaraus 等攻略するために部隊を派遣していた。ちなみに、マナスの回城は七月、満城は九月中旬、クルカラウスは九月末に陥落した。それと同時に、ウルムチの東干たちはクチャのホージャたちに使者を送り、ウルムチ満城攻略のための援軍を要請していた。その要請に対して、クチャ政権の東方遠征軍の総大将イスハーク・ホージャは五千の援軍をウルムチに送った。クチャ＝ウルムチ連合軍は、十月初にはウルムチ満城を陥れた。このことは、同治回疆反乱の中で、異なる反乱勢力同士が共闘した珍しい事例であった。クチャ＝ウルムチ連合軍はその後、十月中までに昌吉、呼図壁を次々に陥れた。クチャ軍はウルムチを去ってから、直接トルファンには戻らず、約二ヶ月に渡ってボグド・ウラ Boghdo Ula 山麓周辺のマナス、古城、阜康、ムレイを略奪し、多くの漢人を虐殺した(21)。

四ヶ月程の包囲の後、一八六四年の末頃、トルファンは陥落した。一八六五年春、イスハークは哈密、バルクルへ向けての東方への進撃を再開した。その一年前、九月末には哈密、十月にはバルクルで、ムスリムたちによる反乱が起きていた。しかし、それらは哈密郡王と強力な清軍の防御によって失敗していた。ところが、大軍を率いたイスハークの到来により、この状況も変わり始めた。敗北に直面した哈密郡王バシール Bashir はイスハークに妥協し、六月十六日哈密回城を平和理に降伏させた。イスハークも六月末、満城攻略に成功してバルクルへと進撃した(22)。そこで清軍と激しい戦闘を繰り広げている時、クチャのラシッディン・ハーン・ホージャから新しい命令が届いた。それは、ブズルク Buzrug を奉戴してコーカンドより侵入してヤング・ヒサルを占領したヤークーブ・ベグという新たな敵を打倒するために、

イスハークをクチャに召還するという内容のものであった(23)。実は、この召還には、東方への聖戦で赫々たる戦果をあげ、絶大な人気を博していたイスハーク・ホージャに対するラシッディンの妬みと恐れが隠されていた。しかし、このことはラシッディンのイスハークに対する個人的な嫉妬という問題では済まされなかった。この亀裂は、次第にクチャのホージャたちの間に進んでいった。

一方、ブルハニッディン・ホージャに率いられた総勢二百程の西方遠征軍は、なんら大きな抵抗も受けることなしにクズル Qizil, サイラム Sayram, バイ Bay に進撃した。これらの住民たちは、こぞってブルハニッディンの軍勢に合流し、その数は七千にまで膨張した。カシュガリアとイリ峡谷を結ぶ重要な戦略的要衝であるムザルト Muzart 峠(ムズ・ダヴァーン Muz Daban)を確保すると、アクス攻略のためにカラユルグン Qara Yolghun へ進んだ。そしてクチャから五十マイル程離れたヤカエリク Yaqa Ariq という地点で、アクスのハーキム, サイド・ベグ Sa'id Beg に率いられたアクス軍の奇襲を受け、クチャ軍は大半を失い、ブルハニッディンはクチャへ敗走した(24)。

クチャ政権は樹立当初、大きな危機を迎えることになった。ラシッディンは、従兄弟の無様な敗北に怒り、新たに別の軍勢をアクスへ送ることにした。この時、総大将に選ばれたのが、ラシッディンの兄ジャマリッディン・ホージャ Jamal al-Din Khawja であった。ジャマリッディン指揮下のクチャ軍は、当初は八百程であったが、後に二千程までに膨れ上がった。ジャマリッディン軍は良く考えられた作戦の下に行動し、ジャム Jam でサイド・ベグの軍勢を破り、七月にはアクスを占領した(25)。ブルハニッディンとその長子ハミッディン・ホージャ Ham al-Din Khawja は一軍を率い、アクスの西方にある重要都市ウシュ・トルファンを攻略した(26)。

ウシュ・トルファン占領後、ハミッディンはカシュガル征服のために、より多くの軍勢を集めた。彼は、カシュガル回城のベグたちと組んで、キルギズの頭目シッディーク・ベグを打倒しようと謀っていた。ハミッディン軍は十月ウシュ・トルファンを出発し、間もなくしてカシュガル近郊のアルトーシュに到着した。このことを知ったシッディークは直ちに陣出してクチャ軍

をキルギズ軍の厳重な監視下に置き、アルトーシュへ釘付けにしてクチャ軍を完全に打ち破った。結局、ハミッディン軍は何の成果を得ることもないまま、十二月末ウシュ・トルファンへ退却した(27)。

一八六五年初、ラシッディン・ハーン・ホージャは、ウシュ・トルファン以西の地への勢力範囲の拡大を決定した。新たな西方遠征軍として、弟ナズィリッディン・ホージャ Nazir al-Din の指揮下に四千の軍勢をヤルカンドに派遣し、それと同時に、ウシュ・トルファンの軍勢にもヤルカンド進撃を命令した。ブルハニッディン、ハミッディン父子は二千の軍勢を率いて進軍し、マラルバシ Maralbashi を降伏させた。ウシュ・トルファンとクチャの軍勢は合流して、大きな抵抗を受けることもなく、ヤルカンドに入城した。そして、土着の東干たちと回城を分割してアブドゥル・ラフマーンと戦った。この時、ヤルカンドの有力なベグであるニヤーズ・ベグは、ヤークーブ・ベグに援軍を要請してクチャ＝東干連合軍に対抗した。ここで、クチャのホージャたちは始めてヤークーブと干戈を交えた。この第一次ヤルカンド攻防戦は、ハミッディンの奮戦によってヤークーブ軍を撃退し、クチャ軍の勝利に終わった。その後、クチャ＝東干連合軍はヤルカンドの満城を攻略したものの、相互に不和が発生した。そのためクチャ軍は本拠地へ引き上げてしまった(28)。

四月、クチャのホージャたちとヤルカンドの東干たちは、ホータン攻略のために新たな遠征軍を編成した。アブドゥル・ラフマーン Abd al-Rahman 指揮下のホータン軍は、ホータンの北西六十マイル程にあるピアルマ Piyalma という地点で、クチャ軍と待峙した。この戦闘で、ホータン側は指揮官のアブドゥル・ラフマーンを失ったものの、勝利を得てクチャ軍をヤルカンドへ退却させた(29)。

4) ハーン・アリクの戦いと滅亡

一八六五年七月クチャ政権はカシュガル近郊のハーン・アリク Khan Ariq という地で、ヤークーブ・ベグ軍と東トルキスタンの覇権をめぐる天王山ともいべき大決戦を行った。アクスの太守ジャマリッディン・ホージャは、

クチャやウシュ・トルファンから大軍を召集した。サイラーミーの『安寧史』によれば、その総数は二万六千にも及んだ。ジャマリッディン指揮下の大軍は、先ずヤルカンドを占領し、その地で更に多くの兵員を集めた。信じがたいことであるが、その数は七万二千にも及ぶ東トルキスタン史上未曾有の大軍となった。クチャ軍は、協道を通してヤンギ・ヒサルを迂回してカシュガルを急襲しようとした。この大軍は、クチャ以西の主要都市から徴集された人々によって編成され、その中には東干の砲兵隊も存在した。一方、ヤークーブ・ベグは小規模な軍勢しか召集できなかった。二百名程のバダクシャン兵と一千騎余のキルギーズ-キプチャーク騎兵など、総計千四百余りの軍勢(30)が、ハーン・アリクの地に展開した。ヤークーブ・ベグ軍が「天空のプレアデス星団」の如きなら、クチャ軍は「七層の天の全ての星々」であった。ハーン・アリクで両軍は衝突し、激しい戦闘を繰り広げた。しかしながら、ヤークーブはかなりの手傷を負い、寡勢にもかかわらず、クチャ軍に対して大勝利を収めたのであった。クチャ軍は完全に壊滅し、アクスへと敗走した(31)。この大決戦を契機にしてクチャ政権は急速に衰退していき、覇権への主導権はヤークーブの手に移っていった。

クチャ軍が七万二千の軍勢であったということは疑わしいものの、何れにせよヤークーブ軍に対して数的には圧倒的優勢であった。圧倒的な人海戦術で迫りながらもクチャ軍が敗北した原因は何であろうか。その大きな原因は、それぞれの軍勢の構成にあった。先ず、ヤークーブ軍の中核は、十分な戦闘経験を積んだ勇壮なキルギーズやキプチャーク遊牧民と屈強なバダクシャン山岳民であり、それらの統率者たちはコーカンドの武将たちであった。一方、クチャ軍の大部分は軍事訓練を受けたことのない人々を都市から寄せ集めたもので、その指揮官たちの大部分は宗教指導者たちであった(32)。つまり、烏合の衆に対する歴戦の強者たちの勝利であった。ハーン・アリクの敗報を聞いたヤルカンド残留のクチャ軍は、アクスに逃亡した。ヤークーブはすかさずヤルカンドに軍勢を送って易々とヤルカンドを占領した(33)。

ヤークーブ・ベグがホータンを奸計によって征服し、その政権の基盤を着々と固めている間、クチャ政権は既に衰退の兆候を露呈していた。サイラーミー

は、ウシュ・トルファンとルクチュンでの反乱を記録している。それにもまして、クチャ政権にとって何よりも深刻であったのは、ホージャたちの間での内紛であった。この内紛は、ラシッディン兄弟とその従兄弟たちの対立という図式で進展していった。クチャのホージャたちの間での亀裂が深刻化するに連れて、アクスやクチャの高官たちの中には、クチャ政権を見限ってヤークーブ・ベグに内通する者たちが出始めた。その中には宰相クラスの者までもが、ヤークーブ・ベグに密書を送ってヤークーブ軍がクチャへ進軍するさいには、呼応すると約束する始末であった。

クチャの支配層の内紛を見て、ヤークーブ・ベグは終にこの機会に乗じる決心をした。一八六七年六月、ヤークーブは軍を率いてカシュガルを出発してマラルバシ経由でアクスへ進撃し、クチャ側の抵抗を受けながらも、同月、大した抵抗も受けることなくアクスへ入城した。さらに、ヤークーブ軍の分遣隊はウシュ・トルファンの無血入城に成功した。そして、一八六七年六月五日、終にクチャは陥落した。それは、ヤークーブがカシュガルを出発してから、ほぼ一ヶ月後のことであった。クチャのホージャたちの多くは捕らえられてカシュガルに抑留された。彼らの抑留生活は、一八七七年清軍の再征服の時まで続いた。ラシッディン自身はクチャで殺され、ジャマリッディンはヤルカンドで殺された。また、ブルハニッディン父子等はカシュガルの地で隠棲させられた。ヤークーブ・ベグはイスハークをクチャの太守に任命し、シャヤル、ブグル、クルラ等を管轄させた。この様にクチャのラシッディン・ハーン・ホージャ政権は、一八六四年六月の樹立から正に三年後の一八六七年六月に滅亡したのであった(34)。

- (1) 毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』p.54-55。
- (2) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.40-41。
- (3) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.47-52。
- (4) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.49, 『平回志』卷七, 『戡定新疆記』卷一。
- (5) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.43-53。
- (6) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.46-47。

- (7) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.53-54.
- (8) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.54.
- (9) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.54.
- (10) ウイグル人からはダウド・アホン Daud Akhund として知られていた。東干たちの政権で、彼らが寧夏、陝西、甘肅等と同様にジャフリーヤ派に属していたことは間違いない。Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.61-62.
- (11) タランチを中心にした政権。Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.63-65.
- (12) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.61.
- (13) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.60-61.
- (14) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.63.
- (15) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.55.
- (16) 『戡定新疆記』 卷一、毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』 p.55-56.
- (17) メヴラナ・エルシッディンは、父ジャラリッディン Jalal al-Din とともに、モグリスタン汗国のトグルク・ティムール・ハーン Tughluq Timur Khan (在位 1347-61) をイスラム教に改宗させた。毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』 p.58-60。
金浩東氏によれば、メヴラナ・ジャラリッディン、エルシッディン父子はカタキー・ウワイスイー Katakī Uwaisī 派のスーフィーであったという。諸説があるものの、ラシッディン等のクチャのホージャたちもこの教派に属していた可能性が強い。Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.56-60.
- (18) 毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』 p.56.
- (19) 毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』 p.56-58.
- (20) 毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』 p.113-123.
- (21) 毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』 p.123-133.
- (22) 毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』 p.133-138.
- (23) 毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』 p.138-144.
- (24) 毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』 p.61-65.
- (25) 毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』 p.66-70.
- (26) 毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』 p.70-77.
- (27) 毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』 p.77-80.
- (28) 毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』 p.80-84.
- (29) 毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』 p.107-109.
- (30) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.114.
- (31) 毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』 p.85-92.
- (32) Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion" p.115.
- (33) 毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』 p.92.
- (34) 毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』 p.145-152.

結びに代えて

以上、清朝の新疆制服から同治回疆反乱の勃発、そしてクチャのラシッディン政権の興亡の概略を説明してきた。クチャ政権は清朝権力崩壊後、混乱に陥った秩序の回復のために、各勢力間の妥協の産物として新疆各地で成立した暫定的な政権の一つであった。そして一年余りの間に東はカラシャールから西はマラルバシ、ヤルカンドまでの広大な版図を手に入れた。しかし、ハーン・アリの決戦でヤークブ・ベグに惨敗を喫してからは、支配層の間での内紛によって急速に朽ち果てていった。そして、内紛に明け暮れているところをヤークブ・ベグに蹂躪されて滅亡した。結局、オアシス定住民の間からは、新疆全体を統一する勢力は生まれなかった。その後、新疆を二分する、もう一方の雄となった烏魯木齊の東干勢力である清真国も、二度に及ぶカシュガルからの遠征軍によってヤークブ・ベグに屈服した。結局、日本の四倍以上の面積を持つ広大な新疆を統一したのは、土着のウイグル人ではなく、ヤークブ・ベグを中心としたコーカンドの残党所謂外来者たちであった。

史料・参考文献

- 岩村忍『世界の歴史 5 西域とイスラム』中公文庫 1975
 ウイグル語研究会編『GULBAGH』東京 1992
 《維吾爾族簡史》編写組編『維吾爾族簡史』烏魯木齊 1991
 片岡一忠『清朝新疆統治研究』雄山閣出版 1991
 加藤直人「七人のホージャたちの聖戦」(『史学雑誌』86-1)
 『戡定新疆記』(『中国近代史資料叢刊 回民起義』上海 1952)
 Kim, Ho-Dong "The Muslim Rebellion and the Khashghar Emirate in Chinese Central Asia, 1864-1877." Ph. D. dissertation: Harvard University, May 1986
 小林一美『清朝末期の戦乱』新人物往来社 1992
 佐口透『新疆民族史研究』吉川弘文館 1986
 佐口透『ロシアとアジア草原』吉川弘文館 1966
 佐口透「カシュガル-ハーン国とホージャ家」(『岩波講座世界歴史』13 岩波書店

1971)

- 佐口透「東トルキスタンと清朝」（『岩波講座世界歴史』13 岩波書店 1971）
佐口透「清朝治下のウイグル社会」（『岩波講座世界歴史』13 岩波書店 1971）
佐口透「一九世紀中央アジア社会の変容」（『岩波講座世界歴史』21 岩波書店 1971）
嶋田襄平「清代回疆の人頭税」（『史学雑誌』61-11）
新免康「ヤークーブ・ベグ政権の性格に関する一考察」（『史学雑誌』96-4）
『清実録穆斯林史料輯録』寧夏 1988
張承志『回教から見た中国』中央公論社 1993
張承志『殉教の中国イスラム』亜紀書房 1993
濱田正美「一九世紀ウイグル歴史文献序説」（『東方学報』第55冊）
濱田正美「『塩の義務』と『聖戦』との間で」（『東洋史研究』52-2）
『平回志』（『中国近代史資料叢刊 回民起義』上海 1952）
方英楷『新疆屯墾史』烏魯木齊 1989
堀直「18-19世紀ウイグル族人口試論」（『史林』60-4）
堀直「清朝の回疆統治についての二、三の問題」（『史学雑誌』）
堀直「歴史認識と歴史叙述」（『現代歴史学入門』東京大学出版会 1987）
間野英二『中央アジアの歴史』講談社現代新書 1977
間野英二・堀直他『内陸アジア』朝日新聞社 1992
毛拉・穆薩・賽拉密『安寧史』烏魯木齊 1989（現代維吾爾語版）